
跡見の人文教育に期待すること



三谷 博

跡見女子大学に着任して6年が経ち、この春で長い教職歴を終えることとなった。特任教員のため学内運営にはタッチしなかったが、教育面ではそれなりに努力した。その所感を記して、お世話になった御礼としたい。

私の初任は学習院女子短大だったので女子大という環境にはさして戸惑わなかったが、学生の気質には昔と大きな差があり、適応に4年間もかかってしまった。2年生の人文学研究入門で、テキストに維新史の文献として、福沢諭吉『福翁自伝』と山川菊栄『武家の女性』を選んだ。いずれも英訳されて広く親しまれているものである。3年目に、これをいま中等教育が重要な課題として取組んでいるアクティブ・ラーニング方式で使ってみた。教員が一方的に知識を押し込むのではなく、学生の側から問題を見つけ、討論し、発表するという授業形式である。各回に2章ずつほどを読んできてもらい、90分を二つに割って、前半で5・6人ずつのグループごとに議論して問題を2・3作り、後半で学生自ら発表・討論に当ててもらおうという仕組である。以前授業参観した高校では学生たちが実楽しそうに取組んでいた、ここでもそうなるかと期待した。

しかし、結果は惨敗。学期が終った時、学生たちは呆然としていた。何しろこちらは初めての経験なので、やり方が下手だったのは間違いない。失敗で止めるのは癪なので、翌年もう一度チャレンジした。学生たちは問題を自分の文で表現するのが苦手と見えたので、面白そうな箇所や理解しにくい箇所を3・4行抜出してくるよう指示したら、今度はうまくいった。それを1・2行の問いに書き変えるのは易しくないようだったが、それでも学期の終りの顔は晴々としていた。歴史の教員が一番困るのは学生たちが歴史は暗記物だと信じ込んでいることである。憶えるな、楽しめというのだが、それをどう実現するか。良い本を読んでもらうに若くはなく、それにはこうした作業の中で楽しみを知り、スキルを身につけてもらうのが一番ではなからうか。

人文学はいま世界的にピンチである。世は挙げてAIに代表されるような技術革新や営業上手な人材を求め、すぐ結果が出ない学問は無用と断ずるようになった。現在生じている世界秩序の不安定はこのような部分最適化の名人たちに起因するところが少なくない。世の全体を俯瞰すること、未来は決して現在の延長上にはないこと、多様性こそ不可測性への対処の鍵であること。歴史に限らず、ヒューマニティズはこうした発想を鍛える学問であった。

跡見の学生にこのように高度な学問を身につけてもらえるだろうか。難しいかも知れない。しかし、不可測な未来は身近な世界にも生ずる。そのとき慌てないには、先人の経験、とくに失敗が参考になる。本の中で自分と異なる環境に生きた人々を理解しようと努力すれば、見知らぬ他者や未知に対処する能力は上がるだろう。かつ、日常をSNSで生きる今どきの若者にとって、書物を批判的に読む経験は情報の真贋を見分けるスキルを身に付ける良い機会になるだろう。跡見の人文学が学生たちにこんな贈物ができるようになるなら、それほど嬉しいことはない。